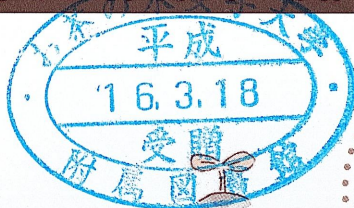


幼児の教育

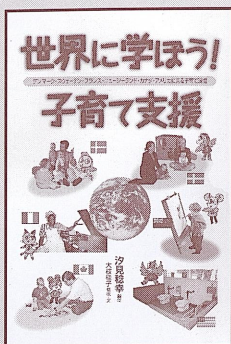
家庭・保育所・幼稚園



2004

3





世界に学ぼう!

子育て支援

デンマーク・スウェーデン・フランス・ニュージーランド・カナダ・アメリカに見る子育て環境

世界の子育て環境がわかる。

子育て支援に関して、世界には優れた施策や市民活動を展開している国々が存在します。本書では、デンマーク・スウェーデン・フランス・ニュージーランド・カナダ・アメリカの6か国を取り上げて、社会背景とともに育児理念・法制度・保育サービスの種類などを紹介。コミックやコラム、各種データも盛り込み、これからの子育て支援、社会のあり方を考えるうえで役立つ情報満載の一冊です。

本書の内容(目次より抜粋)

- デンマーク……………親の参加が義務づけられる運営協議会 / 普遍主義とノーマライゼーションを理念に
- スウェーデン……………世界一の女性就業率を支える保育サービス / 1歳までは育児に専念
- フランス……………卓越した家族給付と保育・教育システム / 2時間の昼食とふんだんな休暇
- ニュージーランド……………疑似バウチャー制度による保育支援 / 伝統的な暮らしりと増加する離婚
- カナダ……………市民活動に支えられる子育て支援 / 厳しい生活状況と高い女性の就労率
- アメリカ……………保育行政の遅れを補う民間の体制 / 保守的な育児観と軽視される保育

汐見穂幸編著 大枝桂子構成・文 A5判 208頁 定価: 本体1,800円+税



簡単
手作り



中谷真弓の

エプロンシアター

ベストセレクション

ポケットから生まれる、とっておきの物語!

エプロンシアターの考案者、中谷真弓先生によるベストセレクション。「名作赤ずきんちゃん」「これくらいのおべんとうばこ」「なぞなぞパンやさん」「誕生日おめでとう」を収録。エプロン・人形の作り方の基本、原寸大型紙付きで、すぐできる!

中谷真弓著 AB判 80頁 本文(カラ-40頁/2色40頁)
定価: 本体2,200円+税



キンダーブックの
フレール館

幼児の教育

第103巻 第3号



幼児の教育 目次

—第一〇三卷 第三号—

© 2004
日本幼稚園協会

巻頭言

昭和二十年以降の幼稚園・保育所の一元化論をめぐって……………岡田 正章…(4)

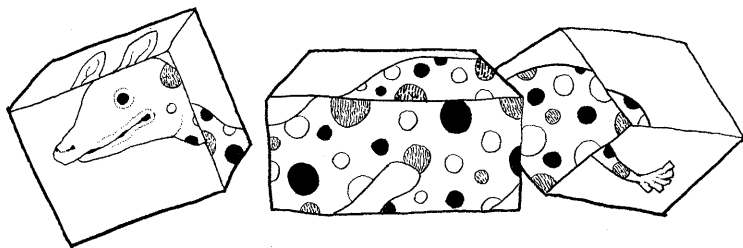
せつな系植物楽 植物ぼろぼろ……………群馬 直美…(9)

「遊び雑感」 その四 人形の果たす役わり……………吉村真理子…(14)

傘のぶつかり合いに思う……………酒井 幸子…(22)

ニューヨークに住む日本の子どもたち(3)

—「NY子どものくに幼稚園」での学び—……………鍋島 恵美…(28)



ある日 (34)

障碍をもつ幼児の保育(19)——この子と出会ったとき——

音に敏感な子ども 津守 真・津守 房江 (36)

手づくり活動の楽しさすばらしさ(12) 浜本 昌宏 (42)

退職園長による子育て塾(2) たくさんの出会いと発見 戎 喜久恵 (43)

プレントでの障碍児へのサポート 清原 規子 (52)

TO・NI・KARAひろば その十二 嶺村 法子 (58)

表紙絵／藤原ヒロコ

扉題字／津守 真

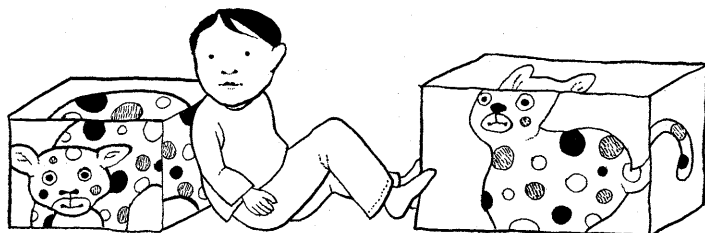
扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ「絵つみき」

編集委員／田代

和美・佐藤 寛子・吉岡 晶子

編集部／河合 聡子・仲 明子



巻頭言

昭和二十年以降の

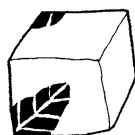
幼稚園・保育所の一元化論をめぐって

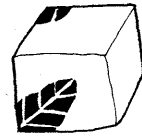
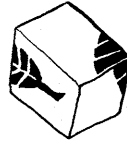
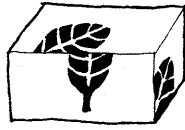
岡田 正章

第二次世界大戦終戦（昭和二十年）後から今日まで約六十五年の間における幼稚園と保育所との一元化をめぐる論議について、三期にわけてその特性を考察したい。

一 昭和三十五年頃まで

この期間は、大正時代から論ぜられてきた有識者の一元化論が、広く保育界全体に広がったことが一つの特性といえよう。一元化をめざす動きは、民主主義・人権の尊重を基本理念とする新憲法の下、直ちに一元化が実現されるよう国会での建議にまで





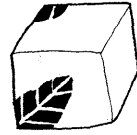
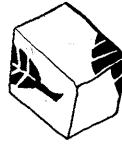
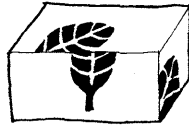
なった。しかし、新たに公布された学校教育法、児童福祉法はそれぞれ幼稚園を学校、保育所を児童福祉施設に位置づけ、制度上は従来以上に二元化を確定するものにと留まった。

その上、児童福祉法は法律の建て前では、そこに入所する乳幼児は、戦前の託児所と異なり、保護者が労働または疾病によりその乳幼児の保育が欠けると市町村長が認めたものは、保護者が貧困であるということは問わないものであったが、実際には戦前の託児所同様にみられていた。

また、幼稚園と保育所の保育内容は、昭和二十三年に文部省から刊行された「保育要領——幼児教育の手びき」が幼稚園・保育所に共通のものとなっていたが、昭和三十一年に文部省が幼稚園だけを対象とする「幼稚園教育要領」を刊行した。これによって幼稚園は教育をするが、保育所は保護の機能を主とするところで教育を行う幼稚園とは異なるというイメージを大きくした。

二 昭和三十五年頃から平成二年頃まで

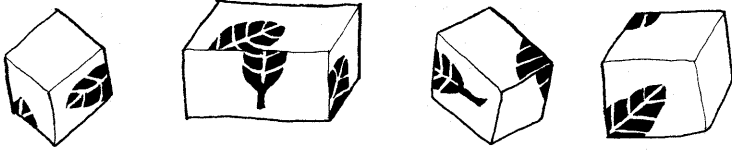
この期間は、高度経済成長期に当り、都市での女性の労働力が大きく求められ、保育所への需要が拡大した。また、中産以上の家庭の経済的な豊かさが増し、家事と育児に専念する主婦が多くなり、幼稚園への就園児が激増した。保育所見数は昭和三十



五年の約六十九万人から昭和五十五年の約一九五万人に増加した。幼稚園児数は昭和三十五年の約七十四万人から昭和五十五年の約二四〇万人へと増加した。幼稚園児数の約七十三パーセントは私立園に在園していた。

保育所の普及に伴い、幼保一元化のめざす「すべての幼児に教育の機会を均等に」という主張が、保育の研究者・実践者において強く主張された。厚生省はそうした要請にこたえるよう、昭和三十九年に文部省が「幼稚園教育要領」を改訂するに当り、保育所の保育内容のうち三歳以上児の教育的な内容については幼稚園と共通的なものとするよう、各保育所での保育内容を計画・実践するに当り参考となるべく、昭和四十年に「保育所保育指針」を作成し、これを全国に通達した。その前文において「養護と教育とが一体となって豊かな人間性をもった子どもを育成するところに、保育所における保育の基本的性格がある」と記され、厚生行政において保育所における機能について、教育という作用を含むものであることが公的に初めて表明された。

一方、保育所を利用する家庭の多くは、往年におけるような保育所観ではなく、女性の社会的進出が一般化し、中産以上の家庭で父母とも就労しながら子育てを両立させる家庭が多くなってきた。厚生省は一日八時間を原則とする保育時間の保育所を利用するとき、一定の所得以上の保護者からは乳幼児の年齢と所得に応じて保育料を公私立同額で徴収し、国の基準に従って保育料を減額した場合その八割（現在は五割）



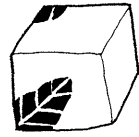
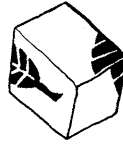
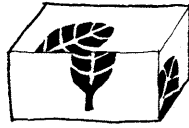
の額を国庫から補助することとしている。この外に市町村のなかにはさらに保護者負担を軽減している市町村がある。保護者負担の軽減は望ましいが、同一所得の家庭で幼稚園とくに私立幼稚園を利用して保護者の保育料負担が保育所利用保護者の負担より重くなっていることは改善されなければならない。国・地方公共団体は幼稚園・保育所に対する公費負担、保護者の保育料負担を公正なものにしなければ、真の教育の機会均等を保障することにならない。幼保一元化の残された大きな課題である。

三 平成二年頃から今日まで

これまでの時期の幼保一元化への道は、民間からの要請に行政が消極的に対応しようとするものであり、行政サイドがその真義を把握し、理念に基づいて積極的に国民にサービスしようとするものではなかった。

この第三期は、行政サイドによる対応が多様に出されてきているということが特性といえよう。しかし、幼稚園・保育所を所管する文部科学省・厚生労働省が対応しようとするのではなく、首相直轄ともいべき各種の改革会議、諮問会議、委員会が幼保一元化を促進しようとするものである。

ただその基本的な視点が、少子化により幼稚園・保育所に在園する幼児数が減少す



ることに対応し、両者を合併・統合し財政的負担を軽減することをめざしていることが目立つ。

首相を本部長とする構造改革推進本部が従来の規制を超えて新たな各種制度を開発しようとする試みを行う特区の事項として、幼稚園と保育所の園児の合同保育を認めている。そこでの成果が注目されている。ここでは長時間保育を受ける園児と短時間保育で帰宅する園児とがそれぞれよく育つことを保障する保育が行なわれるものとならなければならない。このためには、必ず保育者数、施設に従来以上にゆとりをもたせるようにすることが要請されよう。

幼保一元化は、そうした合同保育方式による保育施設だけでなく、地域の実情に即し、多様な保育方式の保育施設を配置し、何れの保育施設においてもそこに入園するすべての乳児・幼児の情緒が安定し、心身の健やかな発達が均しく保障される保育制度の確立をめざす。また、これに要する費用の公的および保護者負担が公正なものとなることは前述のとおりである。このような幼保一元化の一日も早い実現を期したい。

(聖徳大学大学院)

せつな系植物楽しよくぶつがく
植物ぼろぼろ



絵文 群馬直美

才四葉ヒバ

◆
何年か前の大雪の日、私の住んでいるマン
ション入口の二本のヒバの木が、雪の重みに耐
えかねて、横倒しになってしまった。いちめん

の銀世界の中、志し半ばで行き倒れてしまった
人みたいで、コリヤ大変と一大救出作業を開始
した。降り積もった雪を両手で払い、茶褐色の
幹と緑葉を掘り起こすと、身震いしながら少し
からだをもたげた。

「ふは、助かりましたよ。死ぬかと思った」

「よかった。でも、まだまだですよ」

そうなのだ。どんどん雪は降りしきり、ヒバの木さんのからだを被いつくしてゆく。ヒバの木さんは再び目を閉じ、意識が遠のいてゆく様子。

「だめです、だめです、寝たらいけない」

雪を払いヒバの木さんの倒れたからだに肩を入れ込み、力の限り踏ん張りながら、直立体制にもっていかうとがんばる。同じマンションの住人が通りかかるが無関心。なんで誰も助けてくれないんだよおう、こんなに困っている人が

いるのに。怒りのパワーでなんとか直立させると、ヒバの木さんは今度こそ完全復活したように、どどーっと、全身身震いさせ降り積もった雪を落とした。でもちよっと力を抜くと倒れてしまう。頑丈な配水管に、ビニール紐でヒバ

の木さんのからだを縛りつけ、やっと自立させた。

その日から二本のヒバの木さんたちは、配水管に支えられながら、雨の日も風の日も、もろともせずによく育った。まっすぐ育ったヒバの木さんが、ベランダ越しに覗き込む。ふさふさした緑葉がおどけた人の表情で、「どうしたの？ 今日元気ないね」などと話しかけてくれる。ときどきスズメやヒヨドリとたわむれ、小鳥たちのさえずりを届けてくれる。あの日以来、ヒバの木さんと友達になった。



ちよっと前にNHKテレビで、北海道富良野の森のエゾマツさんとトドマツさんの越冬の様子番組を見た。

パキーン――

極寒の富良野の森に鳴り響く衝撃的な音。ト

ドマツの凍裂——あまりの低音のためトドマツさんは幹の内部を破裂させる。そのときの破裂音が、パキーン——。木が叫んでいる！——雪の重みで倒れたあのとときのヒバの木さんたちの痛みがよみがえる。夏の日、キョウチクトウの細長い実を折り取ったとき、滴り落ちた大量の水にキョウチクトウの叫びを見た。植物くんたちのさまざまな叫びの記憶が、いつきに

押し寄せる——内側には氷の粒がびっしり。幹の中心にまで亀裂、と大写し。これが原因で枯れることも、とナレーション。枯れたトドマツの木の画。一本の木に積もる雪の重みは数百キロ。静寂の白銀の世界……太い枝が重みに堪えきれず、どどーっと崩れ落ちる。雪煙る大往生！



▲マツボックリ（ダンススタジオ入口にて2001.11.23拾う）

◆◆◆
ホットカーペットと暖房でぬくぬくの部屋の中に私はいた。カーテンのしまったベランダ窓の向こう側が、ヒューヒュー吹雪く富良野の森に一変する。配水管に縛りつけられたヒバの木さんたちが、寒さにふるえている。



場面は変わりエゾマツさんの話に——一本のエゾマツには三千個近いマツボックリがある。一個のマツボックリは二百個の種を抱えている。ということは、ニサンがロクで、六十万個の種をエゾマツ一本が宿すことになる。秋にその種の半分を地上に落とす。けれど、土の中の細菌に弱いエゾマツの種は、すぐに腐ってしまう。——せっかく生まれてきたのに芽を出さず土に返る種の気持ち……ちいさなからだを土に同化させ、肥沃な土壌を作り出す。それは芽を出すこと以上に価値あることなのだ。

千個以上の閉じたマツボックリが冬を待つ。氷点下十度の世界。丈夫なマツボックリに守られた種は、マイナス七十度にも耐えられる。彼らは雪の結晶が崩れることなく、上空から落ち

てくる日を待ち続ける。

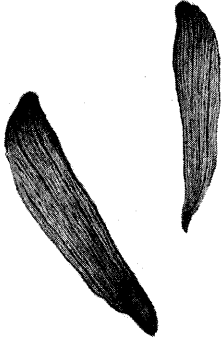
冬一番の冷え込みの朝がやってきた。地上から三十メートル。時間を二百倍に速めた映像——エゾマツの大木のマツボックリが開き、一センチメートル、〇・〇〇ニグラムの種の旅を映し出す。乾燥した大気の中、森の中を回転しながら五百メートルも飛行して、雪の結晶の上に舞い降りる。雪は清潔で細菌も少ない。病弱な彼らにとってはうつつけなのだ。そして彼らは、ある特別な場所に向かって雪面を風に運ばれる。キラキラ、キラキラ。——その先に待ち受けていたのは、倒木。倒木はコケで被われ細菌も少なく水分も豊富。エゾマツの種は倒木の上でしか育たない。長い時間の中で、足元の倒木は消えてゆく。

春の到来。ひととき鮮やかな紅色は、エゾマツの花。画面いっぱいにはエゾマツの花。マツ

ボックリと同じ形の鮮烈な紅色の花。倒木の上
にたどりつけなかった無数の種たちの命の輝き
のように、天に向かって咲き誇る。ここでテレ
ビは終わった。



一説にマツは、神がその木に天降るのをマ
ツ（待つ）意ともいう。六十万個もの種たちを
地上に送り出す神の宿り木エゾマツは、繰り返し
種を旅立たせながら、地球に果てしないメッ
セージを送り続けている。



▲フランスカイガンショ
ウのマツボックリの種
（スペイン・パドロン
林にて1994.4.27採集）

「たとえ倒木の上にたどりつかなくて途中で朽
ちてしまっても、動物に食べられてしまっ
ても、どの子もみんな素晴らしく、役立つ生涯を
送っているのだよ。無駄なことやものなど、な
にひとつとしてないのだよ。みんなそれぞれ同
じ価値があり光り輝く存在なのだ」

あの寒い大雪の日、私が体験したささやかな
ヒバの木さんたちとの記憶とともに、北海道富
良野の森のエゾマツさんとトドマツさんのそん
なメッセージが、心に強く響いた。

（葉画家）

☆本文中の絵は筆者による

マツボックリ

紙／テンペラ SIZE:180mm×142mm

マツボックリの種

紙／テンペラ SIZE:227mm×158mm

「遊び」雑感 その四

人形の果たす役わり

吉村 真理子

子どもと人形の関わり

店頭で雛人形が飾られると、遠い昔の自分の人形を思い出し心の奥に暖かい灯がともったような気分になる。お雛さまに限らず、子どもは人形に対して他の玩具とは異なった感情を抱いてきたのではなからうか。昔から女兒は人形で遊ぶものと思っていたのに、私がまだ保育現場にいた頃、当時の子どもたちの人形に対する関心が薄くなってきたように思えて、仲間の保育者たちと話し合ったことがあった。三歳児はまだ人形を自分の子どものもの

ように抱いたりおぶったり寝かせたりして遊ぶ姿が見られたが、四、五歳児になるといわゆる「人形遊び」はほとんど姿を消し、他の遊びの道具として用いられるようになっていた。空き箱でトラックや船などを作ったときの乗客として詰め込んだり、男児はゴム鉄砲の標的にして倒すなど人形への愛情が感じられない様子に、これも成長の過程かと思いいながらもみんな心を痛めていた。

ところが、雛祭りが近づきそれぞれのクラスで自分たちの「おひなさま」を作りはじめると、意外なことに年長組の男児も紙粘土や化粧品の空きビン、布や千代紙などで工夫しながら熱心に一对の内裏びな作りに取り組み、出来上がると満足げに目を細めて棚の上に飾っている。年少児が見にくると「さわっちゃだめだよ、見るだけだよ」などとやさしく注意している様子が微笑ましい。母親が迎えに来ると手を引っ張るようにして雛だんの前に連れて行き「これがぼくのつくったおひなさまだよ」と得意そうに報告している。家に持って帰るときも壊れないようにティッシュペーパーにくるんで箱に入れる気の使い方だ。とてもゴム鉄砲で人形をねらい打ちしていた子どもとは思えない豹変ぶりである。

にもかかわらず、その後も保育室の床に人形が落ちていてもだれも気にせず、片付けるときも足や手を持っておもちゃ箱に放り投げる姿を見たときに「このままでいいのだろうか」「人形の与え方をなんとか工夫してみよう」と勉強会を持つことにした。

勉強会の過程

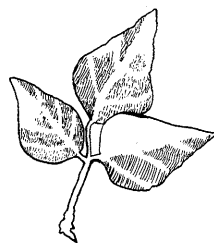
人形によって子どもの関わり方が異なったのは、一つは自分が作る過程で分身のような親密感が育ったものと既製のものの違いであろう。もう一つはその年齢の子どもたちの興味関心と遊びの種類を把握し、それに対応できる人形を用意していなかったのではという反省があった。

そこで、まずは各年齢のクラスごとに人形の種類と関わり方を観察してみようということになり、今まで気にもとめなかった人形との関わり方に視点をしぼってメモを取ってみると、次々と興味深い意見があつたので、その一部を紹介してみよう。

☆三歳未満児の関わり

○歳クラスでは大人が持つてあやす場合は、人間の形であろうと熊やウサギのぬいぐるみと全く反応は同じであること。これらの共通点は目と口のついた顔があることで、ガラガラや風船などとは違い、じっと見つめる時間が多かったような気がするということ。目と口があることで人間の顔との類似点に気づいていたのだろうか。一歳近くなると片手で握れる大きさを感触のよいものが好まれ、何でも口に持つていくので洗濯しやすいおぼろタオルのぬいぐるみが最適という結論になった。

やがて、立つて歩けるようになると人形を「おんぶおんぶ」と言って持つてくる。紐で



背負わせてやるとうれしそうに歩きまわり、すぐに「とって」と降ろさせ、また「おんぶ」を繰り返す。背中に違和感があるのか降ろしたいのに、すぐ「おんぶ」をしたがるのは、自分がお母さんのつもりで人形をあかちゃんに見立てて得意な気分を味わっているのかもしれない。この時期は抱きしめたりおんぶするのにちょうど良い大きさと柔らかさがある。求められる。また、この頃は等身大の人形やあまりリアルにできている人形を恐がり、誰かが持つて近づくと泣き出すこともあった。

二歳になると遊びに意図のようなものが見え始める。小さなかごを見つけると「おかいものいくの」と人形を背負って行く、ふとんに寝かせてとんとたたく、積み木を人形の口にもっていき「さあミルクですよ」と飲ませるまねをしたりする。自分が母親にしてもらったことを、立場を替えて人形に対して行う「つもり遊び」である。

☆三歳以上児の関わり

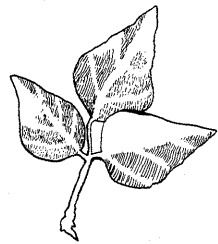
三歳になるとままごとの中に人形が加わり、数人でいわゆる「おうちごっこ」が始まる。むろん人形の役割はあかちゃん大家族としてあつかわれる。二歳児がひとり遊びであったのに比べて三歳児のそれは必ずといっていいほど二〜四人くらいのグループで遊んでいる。社会性の育ちであり、それを支えているのは言葉の発達であらう。

言葉を自在にあやつれるようになるとお互いのコミュニケーションがスムーズになり、お母さん役を名乗り出た子どもの指示にしたがってグループで行動できるようになる。

「おべんと持ってお花見にいきましよう」と言えば、みんなはそこらにあるおはじきやお手玉などを手提げ袋に入れ「これ、おにぎり」「たまごのサンドイッチだよ」「バナナも持っていこう」などと楽しそうにおしゃべりを始める。だれかが「バスでいこう」というと早速椅子を運んできて並べ、みんなで乗り込む。お母さん役の子どもは忘れずにあかちゃん（人形）を乳母車に乗せて押して歩く。

これらの遊びは言葉によって喚起されたイメージを共有することであり、イメージのもとになっているのは各児が最近経験した家族での「お花見」であろう。「お花見」「お弁当」という言葉に、過去の楽しかった行楽の場面を思いだし、その喜びを再現するために手近にあるものを本物に見立てて遊ぶ。これが「ごっこ遊び」である。共通の体験があれば言葉足らずでもイメージが描きやすいので、三歳児の「ごっこ遊び」は日常だれでも体験している食事、買い物、お出掛け（公園、動物園、遊園地）、乗り物（バス、電車）、お祭りなどがほとんどである。

もう一つ、主として男児に多いのはテレビアニメのヒーローごっこである。人気アニメはみんなが見ておりストーリーや役割もわかっているので言葉による説明がなくてもイメージを共有できることと、せりふも単純で「やっつけろ」「エイッ」「ヤー」「トーツ」などの単純な叫びでこと足りるせいかもしれない。この頃にはプラスチックの小さな○



○マン人形の収集に夢中になる子もいる。時には怪物になって積み木の家を打ち壊し人形たちを容赦なく蹴散らす神がかり的な表情は気になるものの、力や強さにあこがれるこの年齢なりの表現かもしれない。四歳くらいまで続く子もいるが、一過性のもものと保育者たちは見ている。

四、五歳になると、日常出会う周りの社会をよく観察していてそれぞれの職業になりきって遊ぶお店ごっこ（最近はスーパー）、病院ごっこ、美容院ごっこ、郵便局ごっこ、幼稚園（保育園）ごっこなどがよく見られる。

ごっこ遊びの意味を考える

こうして人形と関わる遊びを見ていくと、さまざまにごっこ遊びが浮上してきた。人形は二、三歳前期頃まではごっこ遊びに欠かせない物（ただし人間にとっても近い存在）として遊びの仲間になり展開を助けている。生きた子ども同士では相手が思うようにならないので、その前段階として人形相手に他者といっしょに遊びを共有する練習期間とも考えられる。人形は愛情の対象となり「この子となにをして遊ぼうか」と思い巡らすことが筋書きになり遊びが続いていく。言わば複数の人形相手のひとり遊びとも言える。

やがて親しい友達ができると、ごっこ遊びはみんなの知恵と体験を出し合ってよりおもしろくなっていく。ひとりではとても思いつかないストーリーが次々に出され、やって

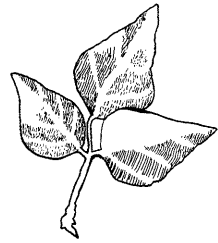
みたい楽しそうなことやとてもできそうにもない冒険も、自分ではなく人形が代わりにやってくれるのだからと安心していられるし、時には「そんなことしちゃだめよ」と人形をたしなめることもある。ちょうど『どろんこハリー』（ジーン・ジオン文 マーガレット・ブロイ・グレラム絵 渡辺茂男訳・福音館）の絵本の中で、子犬のハリーが子どもたちの願望を代行して思いっきりどろんこになって遊んでも、家に入れてもらうには清潔でなければならぬことを納得するのに似ている。

こうして自分たちの作った筋書きでありながら人形の行動を客観的に眺めて是非を判断する経験を経て、今度は子ども同士が直接関わるごっこ遊びの段階に移行していく。人形は脇役となり、先に上げた乗り物の乗客や病院の患者のように、ストーリーに影響をもちないエキストラの役を担うようになる。

冒頭に上げたひな人形の例は製作する喜びと、作品への鑑賞も含めた満足感と思われる。しかし、もっとも大きいのは手作り作品への愛着だったのではなからうか。

ある試み

そこで年長組を対象に一つの試みとして、職員たちが手作りの人形を与えてみることにした。常時子どもの目に触れるよう製作途中の人形をかごに入れ棚の上に置いておくと、



早速寄ってきて「ねえ、何作ってるの」「あ、わかった、お人形だ」「え、こんなにして綿を入れるの」「毛糸の髪の毛だ」と興味津々の様子。毎日登園するとかままでできているかを楽しみにするようになった。ポデイが出来上がり目鼻を刺しゅうすると「かわいい、なんて名前にするの?」「だれのお人形?」と質問攻め。「先生のうちの子どもだけど今度このクラスに入園するからよろしくね」と頼むと「いいよ、お椅子も机もつくらなきゃ」と大張り切り。なぜかアヤちゃんと名前がつけられみんなのアイドルになった。

空き箱で机、椅子、ベッドを作る子や、指編みでマフラーを編んでくれる子、お昼になるとままごとの食器を忘れずに並べてくれる子もいて久しぶりの人形ごっこが年長組に復活し、今まであった人形も仲間に入れて遊ぶようになった。ここで気づいたのは手作り作品のインパクトで、一つのもが出来上がっていく過程を目にすると、自分もその創造に関わっているような期待と愛情が育つこと、子どもにも遊びの中に創る余地を入れること、人形との出会わせ方の演出の大切さであった。

人形遊びのなかでこまやかな思いやりを発揮する機会があると、他の場面でも人や物に対する優しさが育つような気がする。雛祭りの時期に人形遊びを見直してみてもうどうだろうか。

(元松山東雲短期大学)

傘のぶつかり合いに思う

酒井 幸子

遠足が流れた日に

今年東京はよく雨が降る。五歳児の遠足が土砂降りの雨で流れた日、朝、通勤途上で嫌な光景に出合った。駅から続く狭い路上を、幾つもの傘が行き交う。私の前を小学生の女児が二人並んで歩いている。真ん中を歩く二

人がほぼ道路を占拠した形になっている。私も、追い抜くに追い抜けず、後ろから、仕方なく付いて歩く。しかし、向かい側から来る人は交差せざるを得ない。右側から女子高生らしき人、左側から中年男性が同時にやってきた。女児二人はまったく譲る気配がない。女児二人をはさむようにしてそのまますれ

違った。案の定、右側の女子高生と女児の傘がぶつかった。女子高生の方は傘を斜めにしたが、所詮狭い道、双方が心配りをしなければぶつかるのは目に見えていた。しかし、女

児の傘は二人ともまっすぐのまま。不自然なほど微動だにしない。女児の真後ろからこの光景を見ていた私は、こんな時の身のこなしや人への心遣いをまったく知らない、いやしようにしないだけなのかもしれない女児に、当然のこと、情けなさを覚えた。しかし、次の瞬間、女児の放った言葉に情けなさを乗り越し、すっかり重い気持ちにさせられてしまった。

「このくそばあ！」

教育者として

女児は二人とも、身長から見て小学校二、

三年生。すれ違った女子高生と思しき人もその身長は高くない。それ故傘もぶつかる。私から見れば、双方とも、これからまだまだ未来に向かつて伸び行く人たちである。

女子高生に、女児の放った言葉が聞こえたかどうかは分からない。私には振り返って確認する勇氣もなかったが、少なくとも、女子高生からの罵声は聞こえなかった。それがせめてもの救いと私は思った。

傘のすれ違いから起きた何気ない一場面ではあるが、どうにも気が重くなった。小学校二、三年生といえは、ついこの間まで幼稚園に通っていた年齢である。直接かかわってはいないとしても、幼児教育に携わるものとして責任さえ感じてしまふ。

何故気が重くなるのか、何故責任を感じる

のか、こんなことを自問自答しながら、雨の中をとぼとぼと園に向かった。

世の中にこのようなきすぎすした光景は増えていくように思う。通勤電車の乗り降りで、ドア付近に陣取って頑として動かず、乗る人降りる人に睨まれ、一触即発のムードになる光景も度々目にする。混雑した車内で床に置かれた荷物に足をとられ転倒しそうになつたいらだたしい経験は多くの人にあるであらう。そして、このような光景の元凶を最近は若い人がつくっているケースが多くなつたように思う。

さて、傘の件や最近の身近な出来事をただ憂いては始まらない。幸いなことに、私は幼児教育に携わっている。この立場から発

信し、心がけ、努力していけることは多々あるのである。まずは足もと、自園の園児や保護者に、そして教師に、出来ることから始めようと気持ちを立て直した。

電車を乗り継いでの遠足で

世の中のマナーを守る、気持ちよく人と暮らす、およそこういったことは相手の立場や気持ちを理解することから始まる。

幼稚園で電車を乗り継ぎ遠足に出かけることが年に何回かある。この時、公共のルールや電車利用時のマナーなどについて、事前の指導や投げかけが有ると無いのでは、子どもたちの行動に大きな違いが出る。この事前指導の有るか無いかで、責任者として引率する中で、何度か苦い経験を味わったことがある。

ある園で、地下鉄三線を乗り継いで出かけた時のこと。私は顔が真っ赤になり通しだった。ホームでは、ドア毎に分かれて乗れるよう、ホームの幅いっぱいには並ばせ、一般の方の通路をふさいでしまった。混んだ車内では、ブレーキがかかる度に「キヤーツ」、子どもたちの奇声が響いた。駅のトイレでは、待つ場所を考えず子どもたちを通路をふさぐ形で溜まらせ「何考えてるんだ、これじゃ俺たちが通れないじゃないか」と初老の男性から大きなお叱りを受けた。一駅しか乗らない車内で、席を探して座らせる教師と我慢させる教師とがいて子どもたちに不満を抱かせた。

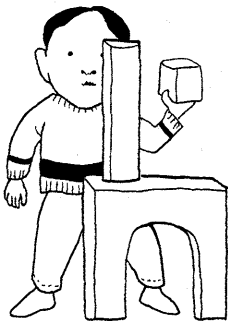
何十人もの子どもたちを安全に引率せねばならない身してみれば他の乗客に思いを馳せる余裕が無かった、というのは言い訳だと

思う。勿論責任者としての私も言い訳は通用しない。

遠足挙行後の反省でこのことを徹底して話し合った。

ある教師は、迷惑をかけていたそのことにすら気付いていなかった。ある教師は、席を探して子どもを座らせるのは当然で、立たせておくということを考えてもみなかったと言った。そしてある教師は、私同様、ずっと赤面する想いでいたと述べた。

教師ですらこのような状況である。子ども



たちがこちらからの働きかけ無しで自主的に望ましい行動が取れる訳は無い。

自然公園、動物園、遊園地……、園外に出る活動にはそれなりの目的がある。豊かな自然に触れる、様々な動物や植物に興味や関心をもつ、遊園地の乗り物に乗り友達と一緒に十分楽しむ、広い場所で体を思いきり動かす等々。そしてその体験をこつこや絵画製作、リズム表現等、後の活動につなげていくこともあるであろう。

一方で、集団での行動の仕方を知る、公共の場でのルールやマナーを守るといったことも、園外に出かけてこそ身に付く大切な目的となり得る。

教師がこのことを肝に銘じた時、少なくとも子どもたちの行動は見事に変わる。

こういったことを通して、子どもたちに、自分以外の他者の存在、自分と相手との違い、相手の気持ちに思いを馳せること、相手への共感、自分を大切に思うこと、相手を受け入れること等、人間としての豊かさを培っていくのだとも思う。

共通の情緒をもつ

「常識とは共通の情緒である」とどなたかが書かれたことを目にしたことがある。最近はこの情緒が実に多様になった。極めつけは「恥ずかしさ」に対するものであろうか。今ここで、それを論じるつもりは無い。しかしこれだけは言える。人として、社会で生活をしていく以上、その地域の多くの人が気持ちよく過ごすために、共通の情緒をもつこと、即ち常識は必要であること。

世相を映す

そしてもう一つ、「自分は正義、悪いのはあなた」、傘の女兒からは無言のこんな思いが感じられた。

身勝手とも思えるこんな光景は、実は、今世間のあちらこちらで展開されている。教育の現場も例外ではない。子ども同士のトラブルで、相談に見える保護者の多くが、自分の子どもは悪くない、相手に非があると訴える。都合の悪いことはすべて人に責任転嫁する。傘の女兒はこんな世相を見事に映し出した。私にはそんな風に思えてならない。

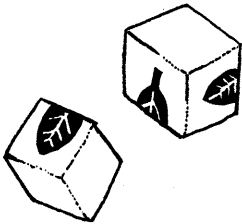
そしてハッとする。知らないうちに自分自身も、世の中のせい、保護者のせい、担任教師たちのせいにしてはいまいか。

明日も雨降り

テレビが天気予報を伝えている。今晚、明日の明け方、午前中と、細かく区切って、降雨の確率を伝えている。どうも明日は一日雨降りらしい。

また同じ光景に出合ったなら、私は言えるであろうか。「並んでいると邪魔になるわよ。ちよつと除けてね」と。

(小日向台町幼稚園)



ニューヨークに住む日本のごどもたち (3)

—「NYのごどもぐくに幼稚園」での学び—

鍋島 恵美

最終「魔女学校 修行 冬の巻」です。前回

は、「ハロウィーン」「サンクスギビング」というアメリカ文化のなかで生活することもとおとなの有り様を紹介しました。今回は、その続きの「クリスマス」の有り様と、現地校で学びだしたごどもぐくに幼稚園の卒園生の生活ぶりについて感じ

たこと考えたことを述べようと思います。

ハロウィーンでは不思議なことが起こりました。今回その不思議が続いたのです。

魔女からのお誘い サンタクロースと出会う
ある晩のこと私は、片づけをしていて机の後ろ

に物を落としてしまいました。取ろうとすると、一枚のオレンジ色の封筒が落ちていたのに気づきました。「なにかしら？」と拾ってみるとそこには魔女の絵が描かれているではありませんか！「えっ？ ひよっとして魔女からの手紙？」と、一瞬ギョッとしました。魔女学校修行の身である私です。魔女だと偽って教え子達には話していません。ひよっとして魔女の怒りにふれて本当の魔女になってしまふのでは……と言う思いが脳裏を走り、恐ろしくなつて毛布をかぶつてベットに潜り込みました。馬鹿げているのですが、そんな気分になつてしまいました。しかし、このことだけは誰にも言えませんでした。

十二月の声を聞くある日の朝、幼稚園に出かけるのにエレベーターに乗り込むと、サンタクロースがいるではありませんか！ 真っ白のふわふわした髭に金の丸縁メガネの優しい笑顔、おながが

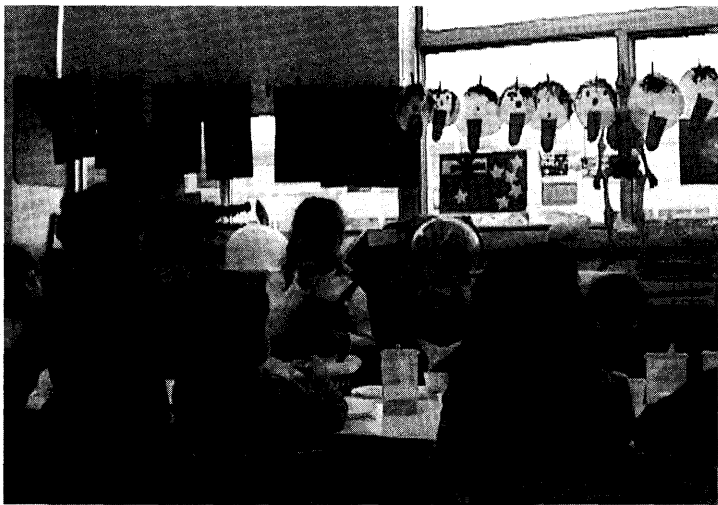
ぶくつと飛び出しているサンタのおじいさん。その人がいるではありませんか！ 「えっ！」思わず「Are you Santa Claus?」と尋ねそうになりましたが、慎みました。「サンタクロースに会えた」という胸の高鳴りは一人ですとどめておけず、幼稚園に着くなりH先生やYさんに伝えると「ハハハハハ」の笑いと共に「サンタクロースを仕事にしている人なのよ」との言葉。サンタクロースが仕事になるキャラクターとはなかなかだと感心してしまいました。赤いTシャツにブルージーンズにサスペンダースタイルのサンタのおじいさんと「Good morning」と挨拶が交わせる日は何かいいことがありそうでウキウキしました。

ある現地校で生活することもたち

H先生に送ってもらい八時三十分学校へ到着。受付で「A few minutes wait」と言われ待っ

ていると、T先生らしき日本婦人が現れ、挨拶を
交わし、先生の部屋で今日の打ち合わせをしまし
た。「校長には話してありますから、どこをごら
んになってもいいですよ」と、それぞれのクラス
を案内して先生に紹介してもらおうと、みなさん
「Sure」と、応じて下さった。

こどもの国の卒園児のN子とM子に出会う。二
人とも先生の話をよく聞いていておとなしいで
す。担任の先生が、私をこどもに紹介されると、
みんなは興味を持って私を見つめます。ジムの時
間でこどもは、担任の先生とアシスタントに付き
添われてジムまで行きます。そこで先生が代わ
り、ジムの先生とボール遊び(今)。ボールの扱い
の基礎を習います。先生の指示に従って動き、十
メートルほど先にひかれた線までボールが届くか
どうかだけのことで「キヤー」と歓声を上げま
す。こんなたわいもないことがおもしろいのかと



▲現地校の教室内（本文の学校ではありません）

思います。N子は、英語を聞いてわかるようですが、M子はわからず周囲のこどものしていることを見て理解している感じです。その洞察力も細かいたところまでは見えてない様子で大丈夫かと心配になります。二人に生気がありません。ところが……日本人のこどもが四人そろったESLの時間になり、先ほどのT先生の部屋に入ってきたとたん「ワァー」とにぎやかです。日本人の先生になり母語でしゃべれると元気はつらつになるのです。英語の学習場面ではできない自己主張と緊張感がほどこけた瞬間なのでしょう。こういう日本人のこどもの様子は昔も今も変わらないようです。ここに住むこどもたちの苦勞を初めて実感として受け止めることができました。こどものくに幼稚園と同様に児童初期はT先生のような日本人でいてバイリンガルである方の存在が、親にもこどもにも大きいこともわかります。

大雪　そして　クリスマス

二〇〇三年十二月五日の朝、H先生から「休園です」との電話。「こっちは雪は降っていませんよ」と伝えると「すぐそこまで来ています」と「すぐそこまで」との確信めいたその言葉を不思議に思っていると、確かにまもなく雪が降り出し見る見るうちに積もっていきました。NYは大雪です。窓の外は、一面に雪景色です。そこには絵本でしか見たことの無かった情景が眼前に広がってきました。窓から雪の積もっていく様子をずっと見ていました。今は、それぞれの家庭の庭や玄関先は、クリスマスのデコレーションです。その飾り付けから出身国が分かるようです。帰り道に私を車に乗せ、デコレーションの美しい住宅街をYさんに案内してもらい楽しみました。真っ暗で積った雪がそのまま残るなかにイルミネーションの明かりがともる静かな情景です。日本のように



▲積った雪が残るなかにもイルミネーション

ジングルベルは鳴っていません。幼稚園に勤める若いY先生は、給料を張り込んで大きなもみの木に大好きなスノービーを飾ったことに大喜びでした。

ここにある もうひとつの幼児教育

大雪の翌日、雪に埋もれた車の雪かきをして、スリッパに注意しながら必死で運転してきた赴任して間もない若いK先生やN先生たち。夢を持った若い人が、憧れてきた大地で初めて出会う困難と格闘しながら生きているエネルギーを感じます。「毎日が刺激的で生きてるだけで精一杯です」とサラリーマンを退職して赴任したS先生の実感のこもった言葉の重みを感じます。まさに彼ら自身、子どもを教育しながら、自分自身の生きる力を身に付けているような気がします。その生身の体験をぶつけていくこと自体に幼児教育の良さ

がここにあると考えられます。一方、子ども達は、日本にいる祖父母から、子ども向けテレビ番組を収録したVTRや、知育産業の教材を送ってもらおうようです。ちょっと過保護で過干渉な気がしてなりません。赴任期間の短い家族にとつては、子どもの帰国後の勉強が気になることもよく分かります。しかし、ここに日本語の幼稚園があり生活をするならば、あとは、NYの風土のなかで、豊かに生活を楽しむ、ここにしかない文化に浸ってもいいのではないのでしょうか？ 虚構の世界と現実が融合して存在する、雄大な自然に恵まれた異文化体験が、生きる力に必ずなっていくと考えるからです。今ある時間を大事にしてほしいと願います。そしてこの大地にある自由と責任の精神を日本に持ち帰ってほしいと思います。

私は、ここに住むみなさんの生き様にある優し

さしてもらいました。異文化の中での生活を通して立しサポートする姿勢にある優しさです。きっとさまざまなことの体験のなかで自ずと身に付けてこられたのだと思います。異文化の中で生きることものを幸せを願って懸命に保育するみなさんのエネルギーをひしひしと感じています。長い教職の中で自分を再構築する貴重な実践的研究体験そのものでした。私にいろいろな機会を与えてくださったH先生や、みなさんに感謝して帰国の途に着きました。

私の魔女学校修行の巻は、終結の時を迎えました。

（京都教育大学附属幼稚園）



撮影・平野 清

ある日





障害をもつ幼児の保育(19)

—この子と出会ったとき—

津守

真 (M)

津守

房江 (F)

音に敏感な子ども

音に対する敏感さは外部からは分かりにくい

—長年、理解することが困難だった子どもの話

M Yくんは養護学校に入学した時から、スト

ローを上手に口にくわえて丸い輪を作って投げて

いました。それから、大声を出して自分を叩いたり、大人を叩いたりしました。私はストローの輪のことも、どうしてこんなに上手に口で丸を作れるのか不思議だったし、たいした理由もないのに自分や他人を叩くのも、長い間理解できずに過ご

しました。いまY君は二十代半ばで、私共よりもずっと背も高いのですが、最近になって私はこの人は音に特別に敏感なことによるのではないかと考えるようになりました。

F Y君は、私共の家の造形教室に通ってきます。先月来た時、途中から、大きな声を出して自分を叩きながら帰ってしまいました。

M Y君のお母さんは、数年前から、家の近くで、数人の親たちと一緒に作業所を開いて、毎日そこで仕事をしているので、この日も私はその作業所の様子を尋ねながら隣の部屋でおしゃべりをしていました。

F この日は、元気のいい女性の参加者が綺麗な箱を家から持ってきてそれで何かを作ろうとしていたんです。大きな高い声で高揚したようにしゃべっていて、もう一人の箱の好きな青年と大声で言い合いになっていました。Y君は当事者ではな

いのに、その声を聞いて突然怒り出したんです。
M 私は、その作業所のことに興味があるので、感心して聞いていたので、大きな声は出しませんでしたよ。

F Y君は、隣の部屋でお母さんたちが話するのは以前から嫌いでしたよ。この子の悪口を言っているわけではないのに、なんとなくお母さん同土困った話をするのが、はじめのうち多かったです。この頃はずっと穏やかで付き合いやすくなっていましたが、この日はいろんなことが重なって、我慢ができなかったのでしょうか。

今になって分かってくること

M こんなことがあって、私はあらためて、この人は普通には聞こえない音を聴いているのではないかと気が付きました。

F Y君は片方の耳を押さえて自分の頭を叩いて

いたから、言い争いを聞くのが辛かったのでしょうか。

M そうでしょうね。ことにこの人は特別に音に敏感だったのです。人に何が聞こえているかは他人には分かりにくい。それだから私は長い間、この子のことが分からなかった。

F 子どもの時、ストローで丸い輪を作った時、その輪を滑り台を滑ってくる子どもに向かって投げていましたね。それから、道路で車のくる方に向けていましたね。あときにはそれは全くの謎でした。Y君の音に対する敏感さが分かっていると、滑り台を滑り降りてくる子どもの勢いや、走ってくる車のエネルギーシユな姿や音にこの子は魅せられていたのではないかと思うようになりました。

M あのととき私にはそこまで分からなかった。行動は目に見えていたけれど、子どもが何を聞いて

どう感じていたかというところまで、想像することができなかった。そこまで分かっていたら、私の保育も変わっていたでしょうね。

F それはちがいますよ！

その子どもの気持ちを分かっていとして一緒にいるときには、その子に対する愛情や同情があつて見ているのだから、同じにただ黙って見ているようでも、関係が違ふでしょう。このことは何でもないように聞いて大事なことだと思う。自分の枠から出ないで見ていたり、高いところから見ているだけではない。自分の枠から出させるのは、本当の意味の相手の内面に対する理解、すなわち愛だと思えます。

幼い時の出来事に立ち戻って

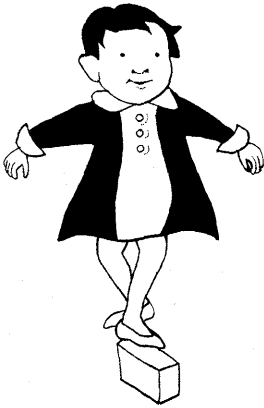
M Y君はこの日、突然に造形教室の途中で帰ってしまったので、その日この人に何が起こったの

か尋ねてみようよと、夕方、あなたはお母さんに電話をしましたね。そのときのことを話して下さい。

F 電話口で直ちに、お母さんは、帰りによその展覧会に立ち寄って楽しんで帰ったことを話されました。

M それはよかったですね。Y君も怒って帰ったのではなかったのですね。

F 私が今日の出来事を話すと、お母さんはすぐに二歳の頃のことを話されました。二歳の頃のY



君はとても音に敏感で、玄関の鍵を開ける音に遠くから気付いたり、戸外の工事の音で目を覚ましたりしたと言います。そして言葉を話さないことや、指差しをしないことなどで、障害があるのではと考えたそうです。でも、玩具を狭い隙間に入れて取り出したり、遊びはよくしていたので、そんなに重く考えなかったと言います。

M そのころのことはともかく、今はこのお母さんはY君が生きやすい場を作ることには一生懸命です。自分の子どもだけでなく、周りにいる人たちにとっても良い場所になるようにと工夫しながらやっているから、話が積極的に気持ちがいい。

F ああ、それがよかったですね。Y君が怒って帰ってしまった時も、せっかく出てきたのだからと、よその展覧会に立ち寄って楽しんで帰ったそうです。

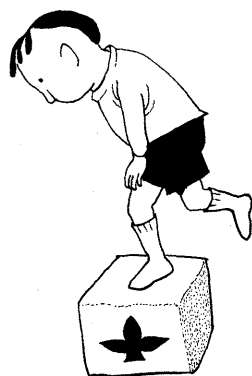
M 小さい時の話も、ちっとも愚痴っぽくなくて

淡々と話してくれました。

幼児期に何を育てるのか

F 今月は我が家でやっている造形教室の時、聴覚が特に敏感と思われるY君の事件があつて、幼児期の生きにくさの一つに子どもにとって何だから分らないような音や振動に対する恐れがあるのではないかと思いました。

またうちの孫のことで恐縮ですが、先日、家中から外を見ていたら選挙の車が通つたのです。薄暗い中を大きな声で候補者が名前を言いながら通るのをこの子が見たのは初めてだったのです。戸惑うような顔で母親と私の顔を見て、作り笑いのような変な表情をしたのです。母親が「あら、泣いているの」と尋ねました。「あれは選挙つていうものなの」と言う母親の説明を膝の上で聞いて、安心したようにまた遊びはじめました。



M その話を聞くと、この子が泣こうか、笑おうか迷っていたのが、母親の顔を見て、言葉を聞いて安心したのだと思う。

幼い子どもは初めてのことに会うことが多いでしょうが、そのことが子ども自身にとって良いことか、恐いことかが分からない、その時子ども判断のもとになるのは周りの大人な態度ですね。世界とどうかかわってゆくかを、大人から学ぶのですね。

F その時子どもが大人に信頼感を持っているか

どうかで、学び方が違うのではないかと思えます。信頼するに足るという思いがあれば、まっすぐに受け取られるでしょう。

それは障碍を持つ子どもだけでなく、どの子どもにとっても大切なことです。

解釈について再び

M ここに述べたY君のように、大声を出して飛び上がったたり、自分を叩いたりして他の人から怖がられるようなとき、この子に何が起こっているかを察する余裕がなく反応してしまいます。それはある程度しかたのないことですが、子どもに何が聞こえているのかを注意してみることが必要だと思います。見ただけでは分からないことを察する想像力です。詩的感觉と言ってもよいでしょう。つまり豊かな感性をもって観察することです。それも修練ですね。

F 以前ある母親が、子どもが変な行動をしてそれをどうしても理解できないと訴えたことがありました。私があるときこの子は特別に敏感な感覚を持っていて私たちは分からないことを感じているのではないかしらと言った。そうしたらその母親は、「ただ変なことをすると見るのではなく、この子はデリケートだと考えることによつてずっと落ち着いて見ていられるようになった」と言いました。解釈の時に大人が先入観を捨てるとか、自分の枠から出て考えるというのに通じることではないでしょうか。

手づくり活動の楽しさ

すばらしさ (12)

浜本昌宏

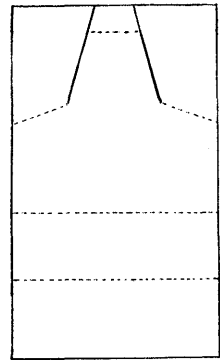
ひなかざり

ひな人形が飾つてあると、部屋はやさしく暖かい雰囲気になります。それが手づくりのものなら、なおいつそう微笑ましく、つくり手の心が、伝わってきてうれしいものです。

写真は、楊枝にペーパーサートのように顔を描いた紙を切り抜いて貼り付け、衣装は長方形の千代紙を折って糊付けしたものです。



襟のところは、その巾をあらかじめ外に折り曲げておけばそのまま出来上がり。



台座は紙粘土の上に楊枝を差し込みました。

このように、ひな人形づくりは、身の回りの素材を

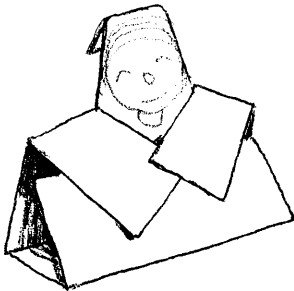
活用することで知恵も生まれ、話題も広がりましょう。

例えば、石や卵、ひょうたんや空きビンなどに顔を描き込んだり、トイレットペーパーの芯でも、布でくるみ衣装にすれば立派な人形に変身。

長方形の厚紙があれば、図のように切り込みや折り目を入れ、糊付けして組み立て、表情豊かな顔を描いても容易につくれます。

生活の中に常に創意性を。
(元三重大学)

☆このシリーズは今回で終わります。



退職園長による子育て塾(2)

たくさんの出会いと発見

戎 喜久恵

にじサタデーの朝

にじサタデーの朝はゆっくりと始まります。九時頃に私が部屋の鍵を開け、きょうの生活の場を整え始めます。きのうまでは別の目的で整えられていた部屋だからです。

その頃から親子が来始めます。挨拶を交わすとすぐ

きょうの生活の場作りに参加してきます。

「きょうは絨毯があるかしら」

「きょうは、草だんごを作るから、汚れるかしらね」

「おやつ時間に敷きましようか」

「それがいいわね」

「お茶は熱いのがいいですよね」

「私、やります」

と、台所にかけていきます。子どもが後を追っかけます。

「きょうは部屋で遊ぶ子は少ないようね」

「おだんごは、どこで作りますか。机はいくついるかしら」

「おやつ作りをしてからタケノコ掘りですよね」

など、次第に参加してくる子どもの年齢や遊び始める様子を見ながら親たちと生活の場を整えていきます。

次回のおやつと中心になる活動を予告しておくので親たちはそれぞれにきょうの子どもたちとの生活が充実するように話し合いながら自分の役割を見つけて動いています。子どもたちも手作りおやつには興味を持ち進んで準備に参加してきます。きょうはじめて参加した方も先輩を見習いながら自分の生活をつくっていきます。

スタッフがすべて準備するのではなく、ここで過ごす子どもの姿を思い浮かべながら、みんなできょうの

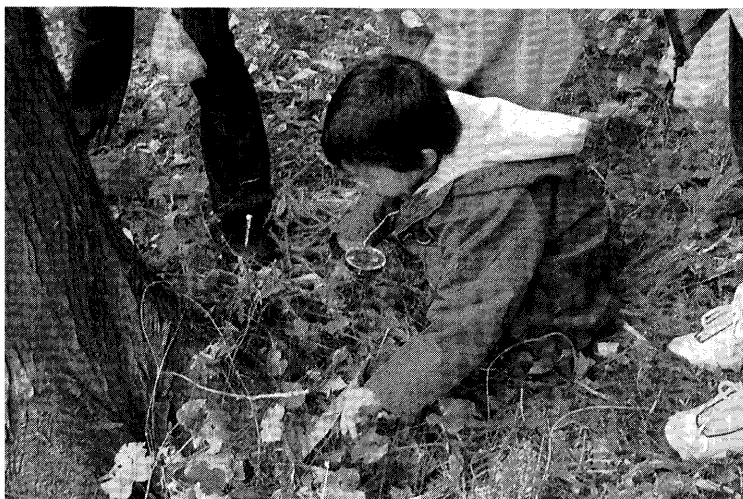
生活の場を創っていくことを大切にしています。

このことがきょうの終わりにも「この机、役だったわね」とか、「次は、こんなにした方がいいわね」など、次回の生活を充実していく基になっていくようです。

お散歩大好き

子どもたちは散歩が大好きです。まおくん（二歳）は、

「"にじサタデー"でいちばん楽しいのは山へお散歩。大きいミミズがおった（いた）のが、すごーいおもしろかった。今度はお芋をみんなで掘って、おいもごはんを食べたい」と、言っています。お芋とは山芋のことです。十一月の散歩で山芋のつるになっている小さなムカゴを見つけて「これなーに」と興味を持ったので、食べられることを伝え、食べ方を話したところ、母親も興味を持ち、家に持ち帰ってムカゴご飯にした



▲野イチゴ発見

そうです。カレーライスやハンバーグで育っている子どもに合うものとは考えられませんが、「食べてみたい気持ち」が「おいしいムカゴ」にしたようです。同じ頃、絵本「14ひきシリーズ」（いわむらかずお 童心社）に出会い、次のお散歩は山芋堀りをしたいと熱望しているのです。

の亜ちゃん（二歳）が浅い小川をのぞき込んでいます。近寄って同じようにのぞきましたが何もいません。三月の小川の水は冷たそうです。「何を見ているのかしら」と、しばらく同じようにしゃがんですんだ水の流れを見ていると、の亜ちゃんのかすかな反応が伝わってきます。山水に流されてきた朽ちた木の葉が浅瀬で小石に引っかかって、しばらく留まってはくるくるっと回って流れていくのです。くるくるっと回るたびにうれしそうに小さな声を出します。小石に木の葉がかかると今か今かと目が離せないのです。一枚一枚みんな違うダンスをするのです。次の木の葉がかか

るまでじっと待っているのです。

かずま君（六歳）ははじめの頃散歩が好きではあり
ませんでした。

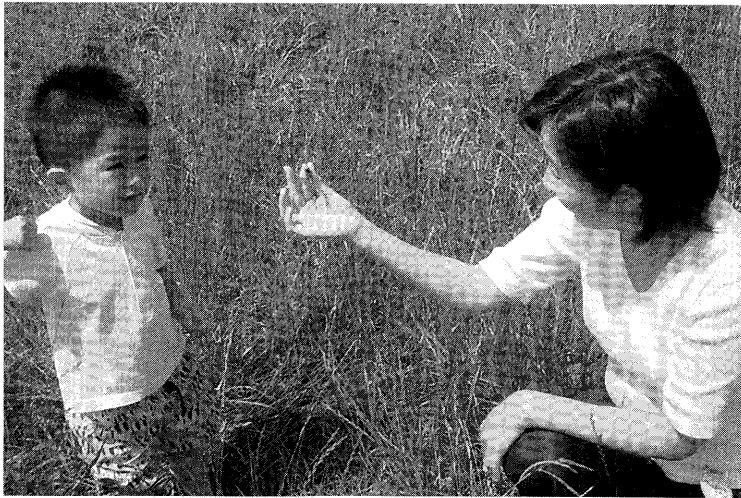
「なーんにも、面白くなんかない。網が無いから何にもとれないよ。ただ歩くだけなんかつまらん」と、言うのです。かずま君は市街地で育ち、自然との付き合い方や自然の楽しみ方をつけていないようなのです。網と虫かごを持って虫取りを、バケツと網を持って魚採りと目的を持った戸外遊びしか経験していません。なので、そこで、「目があるから大丈夫。手があるから大丈夫。私か子どもの頃はこうやって……」と、クローバーの咲いているところに行きました。小さなシジミチヨウが舞っています。「見ていてね」と、シジミチヨウをひよいとつまんで彼に見せました。驚いている彼に「ほらね、網なんかいらないでしょ」と、見せました。簡単に採れると思つた彼は自分もと試みますがうまく採れません。しばらくして、「教え

て」と、自分で捕まえた気持を表現してきたので「蝶を捕まえたと思つたら、蝶のことをよく知らなくちゃ。よく見るとわかるよ。お花にとまた蝶は、羽を閉じたり……開いたり……、いつ、つまんだらいいかな……ほらっ」とタイミングをとらえて採つて見せました。すると、一回一回慎重に試み始めました。今度は蝶をよく見えています。失敗すると首をかしげて失敗の原因を考えているようです。数回の後に成功しました。周りにいる者に見せて歩きました。その後、「この蝶、どうしよう」と、差し出すのです、「どうしたいの」と、たずねると「にがしてやる。そして、また採りたい」と、蝶を放す。放さないと手が使えないこと、また採れるという自信、指の間で細い足を動かしてもがいている蝶への心持ちなどさまざまに思いがそうさせたのでしょうか。網や虫かごがあるとこうはならなかったでしょう。網をむやみに振り回して虫や草を痛めたり、虫かごの中で死なせてしまつても

「残念」で終わるでしょう。

この日の夜、「あんなパパ。先生がコツ教えてくれたよ。シジミチヨウはとまったら羽を閉じたり開いたりするから、こうやって、閉じたときにさっとつかむと飛べないから捕まえられる訳よ」と、得意そうに話したそうです。

「虫、嫌いでなくなつた」という我が子を見て、「今まで私たちが長男は虫が嫌いだと思いこんでいたことは何だったのでしよう。徳島の田舎とはいえ、市街地に暮らす彼らにとって、『にじサタデー』の周りの田圃や小川は未知の自然界であったのだろうか。それにしても自然に対して腰の引ける長男の様子や否定的なことを言つて自分の心の課題から逃げようとする態度に父親としての責任を痛感した。夏休みには出来る限り時間をつくつて海や川や山に出かけた」のだそうです。そして、「海に釣りに行つて感動したこと。いつもは家の中で弟に意地悪したりちよっかいばかり出し



▲ほら、バッタの赤ちゃんみつけた

ている長男も、ごうごうと唸る風や波のしぶきの前では必死に弟を守ろうとする。大自然の前では人間は小さく非力であるのが実感できるし、そこでは助け合ったり励まし合ったりする優しさが自然に現れてくるのだろう。にじサタデーの田圃や小川や裏山はそんな大自然へつながる入口のように思われる」というメッセージをいただきました。

何かのためにという目的を持たないで、いいお天気だから、いい空気だから、ぽかぽか暖かいから、雨が上がったから、と出かける散歩はさまざま自然の事象や現象に出会わせてくれます。草原にこんもり盛り上がった土の小山を発見し、モグラの地中でのくらしを想像したり、蜘蛛の子を散らしたように小さくぴょんぴょんと飛び跳ねるバッタの赤ちゃんの誕生やトンボの羽化の様子に見入ったり、道ばたの小さな野草で作った小さな小さな花束を母親にプレゼントしたり、

植えたばかりの水田に小さなオタマジャクシを見つけ、両手ですくったり、裏山では野イチゴを口に含んだり椎のみを食べたりと、あっという間に半日は過ぎていきます。それぞれの子どもが新しい発見に感動し、その感動を仲間や親に伝えます。自然の中では子どもたちは伸びやかです。穏やかです。飽くことを知りません。ゆとりを持って対象をよく観察し応答しています。むやみに殺生をしません。そんな子どもたちを見て母親は「家の中では私にくっついてばかりで、一人では何もしようとしません。ここに来ると目が生き生きして、私は相手してくれませんか。うれしいです」「自分の子なのに、ここに来ると、こんなことが出来るのか……と新しい発見があります。楽しみです」と話しています。急がされないゆつたりとした時間と、自由感があり自分の意志でかわれる自然と、共感し認め合う仲間があります。お散歩は子どもも親もそして私たちも大好きです。子どもと過ごす幸せを

ともに味わわせて頂いています。

おやつ作り

自分たちで季節をおやつや料理にすることを大切に
しつづ楽しんでいきます。「うちの子、タケノコ食べな
いのです。どうしよう」といわれていた子が五杯もお
代わりをして母親を驚かせたり、顔中粉だらけになっ
て夢中になっている子どもの笑顔に「男の子がこんな
におやつ作りを喜ぶなんて知らなかったわ。家でも
やってあげましょうね」と感動したり、米の粉に水を
加え耳たぶくらいに練って丸めてお湯に入れるだけのお
月見団子に「あら、こんなに簡単なんですか」と唾
然としたり、毎回のおやつを中心とする簡単な食べ物
作りは、親も子も楽しみにしています。ヒットメ
ニューをあげてみます。

*

一月 ヨモギを摘んで「草餅」



▲お月見団子作り

春の香りがします。

二月 畑の大根、ネギ、人参を使って「豚汁」

取れたて野菜がおいしいです。

三月 「ホットケーキ」と「イチゴ」

摘みたてイチゴの味は格別です。

四月 「タケノコご飯」

掘ったばかりのタケノコで夕ご飯もアンコールです。

ルです。

五月 柏、シナモン、サンキラの葉でくるんだ

「かしわもち」

香りを楽しみます。

六月 「流しソーメン」

竹藪の竹で流します。箸でゲットするのも、

流すのも楽しみです。

七月 プールサイドでスイカ割りをして「すいか」、

「七夕団子」

八月 新米を炊いて「おむすび」

九月 栗を拾って「栗ご飯」と「月見団子」

時には芋ご飯も。

十月 なんと金時の「焼き芋」「みかん」

ホットプレートが手軽で楽しい。

十一月 「おむすび」を持って紅葉狩り

大小好みのものを作って。

十二月 「おもちつき」(芋もち、しぶ柿もち)

「ケーキ・クッキー」

*

子どもたちの生活に身近な素材や自分で収穫した物を活かして取り込んでいくようにしています。「汚して大変」と考えるのではなく、楽しんで作って、おいしく食べて、「おいしかったね」。また一緒に作るうね」と自分たちで作った喜びを語りながら感謝をして片づけることを大切にしています。「ええっ、そんなこと出来るの」と我が子の新発見をしている母親の視線を感じながら子どもたちも自分で出来ることを見つけて



▲タケノコ掘り

片づけています。子どもが喜ぶ簡単料理をもっと教えて欲しいという母親もいます。

タケノコ掘り

四月はタケノコのシーズンです。にじサタデーの裏山には竹藪がいっぱいあります。地主の方の好意に甘えて毎年タケノコを掘ります。はじめての経験の方も二度目の方もそれぞれの経験をしています。ここしばらくは佐藤さんの山に入ります。「たくさん生えすぎるので採ってくれると藪が良くなる」と竹藪までの道はあらかじめ点検して下草を刈ってくれています。当日も必ず参加してください。親子とのふれあいを楽しんでおられます。ソーマン流しの竹切りは佐藤さんが頼りです。

(神戸女子大学)

ブレントでの障児へのサポート

清原 規子

去年の秋から（イギリスでは新年度）、ロンドンの中のブレントという、日本でいえば一つの区のような地域で、障児たちと働き始めた。私自身は、ブレントの公的な部署―ブレントチルドレンズプレイサービスと協力しながら活動しているブレントプレイアンシエーション及びブレントメンキャップ

という二つの組織に登録し、現在は障児のための小学校（四歳〜十一歳）でのアフタースクールクラブ（日本で該当するのはおそらく学童保育）、思春期の子どものたちの交流の場としてのジュニアゲイトウェイクラブ、そして十代の子どもたちを抱えている親をサポートする目的で子どもたちとさまざまな活

動を行っているサタデイクラブで働いている。

ブレント地域について

ロンドンの西に位置するブレントは、人口が約二十万人、イギリスの中でも、最も多くの多国籍の人たちが住み、白人が少数派である地域の一つである。主な国籍はアジア人（五十七パーセント）で、特にインド人、バングラディッシュ人、スリランカ人、ネパール人、また中国人や台湾人なども多く住んでいる。特に南部は西インド人の他、黒人も多く、最近では難民なども入ってきていて、ブレントでは約六十種類もの言語が使われているといわれている。大きく二つの地域に分かれていて、北部は富んだ人たち、南部には貧しい人たちが集中している。

ブレントチルドレンズプレイサービスと

ブレントプレイアソシエーション

学校の中で行なわれているものが教育と見られている中で、学校外でもいっばい学ぶところがあるのではないか、それも「遊び」を通して—そんな思いを基本に、アフタースクールクラブやホリデイプレイスキーム（短・長期の休みの間の遊びのグループ、障がい専用のもある）等の活動を支えていっているブレント地区の公的組織がチルドレンズプレイサービスであり、各アフタースクール等がネットワークを作って構成されているのがプレイアソシエーション（チャリティイグループ）である。ただし、これはブレント地域の特色でもあると思うのだが、他の地域では、

このプレイアソシエーションはプレイサービ
スとは全く別のグループ、完全に独立してい
ることが多いのだが、ここではこの二つはほ
とんど同じメンバーで運営されている。

プレイサービスのメンバーが子どもの「遊
び」の重要性を認識、公的機関としては限界
がある部分（たとえば自分たち自身がプレイ
スキームなどを、創り出していく）を、プレ
イアソシエーションを設立することによって
可能にし、そこからいろいろな活動を他のク
ラブにも提供でき、またさらに中身の濃いも
のを創造し広めていこうと常に柔軟に動いて
いる。おそらく、もともとプレイサービスの
メンバーがユースワーカー（十代の子どもた
ちとの活動を作っていく遊び仕掛け人）で
あったり、現場で働いてきた人がほとんどだ
からだと思うが、ともすると、いろんな面で

相対する二つのグ
ループ―行政と民
間―がお互いの思
いを膨らませてい
ける関係であると

いうのは興味深い。特に今、イギリス政府は
政府側から見ると必ずしも必要とは思われな
いそのような活動への補助を減らしていこう
という動きが強まっているので、その中で
個々の小さなクラブにとっては、プレイアソ
シエーションの活動がおそらく重要になっ
てくると思われる。

ブレントメンキャップ

もう一つ、私が登録しているチャリティ
グループのブレントメンキャップ（障害者の
人たちをサポートしている機関）について述



べたい。メンキャンプ自体は一九六〇年ごろに始まり、現在イギリス全国に広がり、それぞれはNationalのメンキャンプに登録しているけれど、いくつかは独立してもいて、プレントのメンキャンプはその一つである。主な活動として、成人のためのグループホームの活動が第一に挙げられるが、障がい児に楽しく遊べる機会を提供していくというのも、重要な活動の一つとなっている。その中で、子どもに視点を置くと同時に、その親へのサポートという点にも視点を置き（おそらく、この根底には、ともに育てていこうという考えがあると思われる）、時には親も自分自身の時間を持てるようにと考え出されたのが毎週土曜日に活動しているサタデイクラブで、この九月から始まったばかりである。

活動としては、子どもたちの自宅までの自

動車での送迎サービスから始まり、ボールプールや大型遊具、センサリールームや美術ルームなどを備えたホールで自由に身体を動かしたり、物を創ったりして遊んだり、時にはテレビやビデオを見て楽しんだり、コンピュータを触ってみたり、また、映画館にいったり、ボーリングをしに出掛けたり等をしてきている。子どもたちは、いつもとは違う空間での違う体験を楽しんでいるようで、ある子どもは、映画に興味はないけれど、そこで食べるポップコーンを楽しむに來たり、いつもは怒ってばかりの子が、センサリールームが大好きで、その部屋の中で気持ちが満たされるのか、出てくる頃には表情が柔らかくなり、私たちへの対応も柔軟になっていたりしている。一人一人に出会うのが楽しみなサタデイクラブだが、親へのサポートでも

あるため、出来るだけ多くの人にこの機会を
と、一つのグループが六週間で終わっていく
のが残念である。

ジュニアゲイトウェイクラブ

一九七〇年代、イギリス国内でメンキャン
プの活動が盛んになると共に、その一端とし
てゲイトウェイクラブ（ボランティアアグルー
プ）というのが、やはり各地に広まっていっ
た。これもやはり、Nationalのものに皆、登
録はしているが、独自に活動しているグルー
プがほとんどである。その中のニースデンゲ
イトウェイクラブが活動している場所が、思
春期の子どもを対象にしたジュニアゲイト
ウェイクラブも参加しているところである。
ニースデンのこのクラブは、もともと、障碍
児を持った親たちが子どもを連れて集まり、

一緒に色々な活動
をしたり、交流す
るところか
ら始まっていて、
キャンプに行った



り、旅行に行ったりなどの活動のほかに、週
に二度ほどそこに集まり、子どもが遊んでい
る傍らで、親たちが話に夢中になっていた
り、そんな交流をするグループであったよう
だ。それが、子ども達がいつの間にか大人に
なり、何人かの親は亡くなり、それでもその
活動はボランティアの人たちに支えられなが
ら続いていて、週に二日、夕刻に開かれてい
るこのクラブに集まっている人たちは、十代
から五十代までと広範囲である。

ジュニアゲイトウェイクラブは、ブレント
プレイアソシエーションが、ニースデンのク

クラブの主催者の人たちと相談しながらこの四月に立ち上げたクラブで、思春期の子どもたち（十五歳から二十代前半まで）を対象に、やはり送迎のサービスから始まり、彼らがいるいろな人たちと触れ合える機会、また、いろいろな活動を体験できる機会を提供している。クラブには、その地域に住む子どもたち

も遊びに来ていたりして障害者と、地域の人とのいい交流の場にもなっている。サッカーやビリヤードをして遊ぶ子や、卓球を楽しんでいる子、絵を描くのに集中している子、友達になりたいと声をかけて欲しいと頼んでくる子や、ちょっとしたスナックを買うのを楽しみにしている子、またビンゴなどのゲームを楽しんでいる子等、それぞれに自分の場所を見つけ、また、成人の人たちが彼らの面倒を見てくれたりしている。このクラブはサタ

デイクラブとは違って、子どもたちのメンバーが増えることはあっても、変わることはないので、毎週一人一人を知っていき、彼らと何を一緒にやっつけていこうかと考えるのはとても楽しみなことである。

イギリスでは、このようなボランティアのグループがかなり多くあり、まずは始めてみようとしてそれぞれの場所で動き始めたものがほとんどである。最近では各地の行政も福祉の分野でいろいろなサービスを充実させてきていて、もちろん問題も多く抱えているであろうが、両者によって、子どもたちが守られ支えられていくことは非常に大事なことと思う。

(ロンドン在住)

その十二

嶺村法子

春、弥生。いよいよ二十三人の子どもたちが幼稚園を巣立つときが来ました。

小学校と併設である私たちの幼稚園では、修了児のほとんどが、そのまま同じ敷地内の小学校に入学します。とはいえ、修了式は大事な区切りの儀式ですから、大勢のご来賓、保護者が参列し厳かに執り行われます。

式場に入場する子どもたちの顔は、晴れがましさと緊張感に満ち、紅潮して輝いて見えません。園長先生から修了証書をいただいた後、三年間の様々な思い出を一人ひとりが言葉にして、みんなで「お別れの言葉」を言いました。

子どもたち一人ひとりの思いを汲みながら、たくさんの方の「楽しかったこと」「がんばったこと」「一年生になったらやってみたいこと」をつなぎ合わせた「お別れの言葉」——その印刷物を読み返してみても、改めて気付いたことがあります。それは、この連載で取り上げてきたこと、すなわち担任である私の心に残った出来事、子どもたちの心にも同じように印象的な出来事として記憶され、子どもたちの言葉で語られていたということでした。

この連載の最後にあたり、修了式での「お別れの言葉」を引用し、今の私の思いを加えながら年長組の一年間を振り返りたいと思います。

期待に満ちた年長組の一学期

隅田川テラスを歩きながら口ずさんだ歌

♪『ぼかぼか てくてく』

ト・ミ・カラ ひろば

「たんぼぼ組から うみ組になりました」

「めぐみ幼稚園から月島第一幼稚園に来ました。友達がたくさんできてうれしかったです」

「お母さんと一緒に、浜離宮の遠足に行ったのがおもしろかったです」

「トリムスポーツセンターで、魔女から手紙とアメをもらっておいしく食べながら帰りました」

「一輪車にのって四人で手をつないで回りました。何度も練習してできるようになりました」

遠足から始まった魔女との手紙のやりとり
修了式当日にも励ましの手紙が届けられ

「さつき屋根の上に魔女がいた」

「カラスも来ていた」
と大騒ぎ

内緒だけれど

あなたたちが魔女に宛てた
たくさんの手紙は

今でも時々私の引き出しの中から顔を出し
あの日へと連れ戻してくれる

♪『みずでつぼう』

「うみ組だけで葛西臨海公園に遠足に行きました。貝をいっぱいもらったのが楽しかったです」

「ひよこ組の時は水が嫌いだったけど、浮き輪につかまって泳げるようになりました」

「月一園で大きなキュウリとナスをとって、
月一カレーを作ったのがおいしかったです」

たくさん野菜を育てた月一園
元小学校のプールだったこの畑は

隣接の区立公園と一緒に

改修されることになった

公園の落ち葉を鋤き込み

何年もかけて土づくりをしてくださった

地域の協力者の働きかけで

公園の一角に月一園は残されることになった

新しく生まれ変わる月一園で

新三年生として

理科の学習ができる日も近いはず

たくさんの行事があった二学期は

子どもたちの口からも

たくさんのおい出が語られた

♪『運動会』

「運動会で、小学生と一緒に月一ボール体操をしました」

「忍者になって手裏剣をとばしたのが楽しかったです」

「芋掘り遠足で大きなお芋を掘って食べました。四年生とお芋パーティーをしました」

「みんなで力を合わせて、わくわくオリンピック」をしました。私は赤組の応援団長をやりました」

「リレーの時、赤組のアンカーになってゴールしたのがうれしかったです。一回目は赤組が勝って、二回戦は白組が勝ちました」

「わくわくギャラリー」で、風船の人形を作りました。紙をぺたぺた貼るのをがんばりました」

「割り箸ペンで、大きな自転車の絵を描きました」

「みんなで、おかしの家を作りました」
「ぐみぐみランド」の入り口の滑り台が楽

TO・MI・KARA ひろば

しかったです。ぼくは、風船バレーをやりました」

「おもちつきが楽しかったです。きな粉のおもちがおいしかったです」

忍者たちの「忍法並びの術」

遊戯室いっぱい飾られた風船人形

魔女からもらった魔法の絵の具と

割り箸ペンで描いた絵……

ひとつひとつの場面が

今も鮮やかによみがえる

そして三学期

幼稚園生活の集大成

「“うみくみ双六”を作りました。友達とサ
イコロを振って遊んだのが楽しかったです」

♪「おかしがすき」

「楽しかった子ども会」

「みんなで「おかしがすきなうみ組探検隊」
の劇を作りました」

「探検隊とカラスをやったのが楽しかったです」

「クシコスボスの合奏で、木琴をがんばり
ました」

「一年生と給食を食べたのが楽しかったです」

「雛祭りのお茶会でお茶をたてたのが楽し
かったです。ドキドキしたけどがんばりまし
た」

カラスからの手紙に導かれ

お菓子の家を探し歩く『うみ組探検隊』は
遠足での魔女との出会い

ト・ミ・カラ ひろば

運動会で取り組んだ忍者

「わくわくギャラリ―」でのお菓子の家作り
みんなつながって

劇遊びが得意でなかった私に

一緒に作りあげていく楽しさを

味わわせてくれた

「お別れの言葉」を考えながら

子どもたちは

ちよつと前の自分と今の自分を比べ

あんなこともこんなことも

できるようになったと気付いた

そして自分の言葉で

ちよつと先の未来への希望と

学ぶことへの意欲を語った

「ぼくは、コマを何度も練習して、お皿の上

で回せるようになりました」

「私は、竹馬をがんばって練習したら、乗れるようになりました」

「私は、大縄で七十二回飛べるようになりました」

「私は、一年生になったら、音楽で歌ったり合奏したりするのが楽しみです」

「ぼくは、ひらがなを全部書けるようになります。宿題もがんばります」

「私は、小学校の大きいプールで遊ぶのが楽しみです」

「ぼくたち私たち、元気な一年生になります」

小さい組の友達や保護者の方々が歌う

まどみちお作詞『おおい木』の歌に送られ
式場を後にする子どもたち

その一人ひとりに

ト・ミ・カラ ひろば



▲修了式が終わり、緊張感から解き放たれた笑顔・笑顔・笑顔！

園長先生から小さな花束が手渡される
そして

お祝いとお礼の固い握手が交わされ

子どもたちは堂々とアーチをくぐっていく

今度は

大きな仕事をやり終えた後の

満足した笑顔で

胸を張って幼稚園を巣立っていく子どもたちには、「あれもこれも、もつと一緒にやりたかった」という担任としての後悔や、もう少し引き留めておきたいという願いは似つかわしくないという知りながら、心のどこかで喜びと安堵に寂しさが混じり合う。

ともあれ、二十三人の今日これから始まる新しい一歩に、心から乾杯！

(中央区立月島第一幼稚園)

☆この連載は今回で終わります。

編 集 後 記

先日、勤めていた幼稚園の同窓会の総会に出席しました。受付で渡された出席者名簿には、残念ながら担任した子どもの名前はありませんでした。一学年下で唯一人、年賀状のやり取りをしているK君の名前が載っていました。入園試験の時に仲良くなったK君は、気がつくと、イタズラっぽい目でここに笑ってそばにいますという男の子でした。K君が年長組になる時に私は退職し、五年ぶりの再会でした。

K君一家が卒園後転居した西宮から、家の周りで拾った松毬で作ったリースを送って頂いたこと、小学校の行き帰りは起伏のある道を走るように通っていたということなどお母様からのお手紙に書かれていたことをもとにはぼ一方的に話した後、茶髪にしていたのを前日染め直してきたこと、これからは専門課程が始まり機械工学を専攻することなど、今の彼のことを聞かせてもらいました。

余興の抽選会の終盤、不意に肩をたたかれました。先に帰ると挨拶をしに来てくれたK君でした。普通の挨拶でしたが、私の心はポカポカと暖かくなりました。

三月は別れの時ではあるけれど、嬉しい再会を生み出す始まりの時でもあると改めて思いました。(河合)

幼 児 の 教 育

第一〇三巻 第三号

(二〇〇四年三月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十六年三月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8620 東京都文京区大塚 二一—一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五—二—一

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一—四—九

☎〇三—五—三九五—六六—三(営業)

☎〇三—五—三九五—六六—四(編集)

振替 〇〇—一九〇—二—一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレーベル館にお願いします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。